



ドクター・ワッシー

診察室

ざくばらん

感情を抑えて

医者には診療を

怒った赤ら顔

正しいことさえ言っておれば、誰からも受け入れてもらえるワケでもない。16歳の環境活動家グレッタさんを観て、あらためて思った。

国連本部での地球温暖化に関する講演だ。怒りでゆがんだ赤ら顔に衝撃を受けた。さらに、「よくもそんなことを」と罵られては、ワッシーのような市民までビビってしまっているのではないか。もう少し上手なアピールの仕方があるはずだ。彼女への反感や批判も少なくなない。

58歳のGさん。高血圧と脳梗塞の患者さんだ。毎日薬を服用し、薬がなくなる予約日には必ず受診することになっている。が、初診からここ数年、約束が守られたことは稀

だ。その間に、脳梗塞が再発している。今は、左の手足が少し不自由だ。

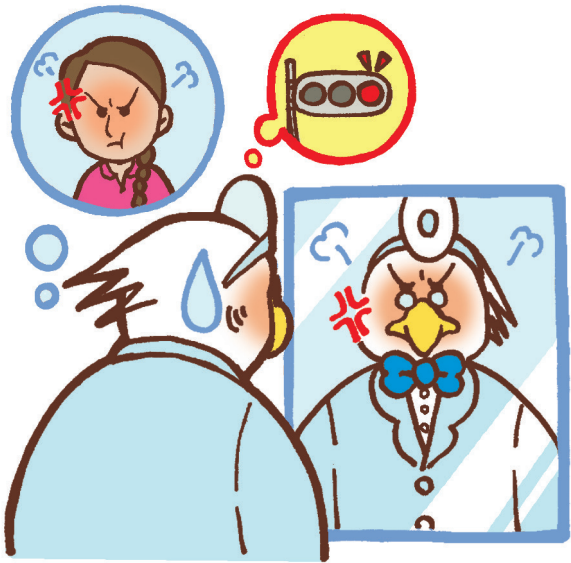
Gさんは、認知症のせいで忘れっぽいのではない。なぜか、いいかげんで、危なっかしい。で、ついワッシーも、「よくもそんなことを」と言いたくなる。が、今はじっと我慢の子だ。もっとも、ワッシーも若い頃は違った。Gさんのような患者さんには、頭に血が昇る。「きちんと薬を飲まないなら、今度から薬が出せない」とか、「ちゃんと検査を受診してくれないなら、もう責任は持たない」などと言ったものだ。

で、どうなったか？ 患者さんは、医者の言うことは百も承知だ。分かっている。だが、できないワケがあるのだ。患者さんは、反発する。受診しなくなる。で、患者さんが医者を変えたとしよう。でも、受診の仕事は変わらない。同じことをする。だから、医者が怒っても、患者さんのためにはならないのだ。

若い頃は、知恵がない。年を取れば、感情の抑制が効きにくくなる。今も瞬間湯沸かし器のようなワッシーである。そろそろ、洗面所の鏡で自分の顔をチェックしたほうがよそそつだ。赤ら顔は危険信号である。

(石黒修三 いしぐろクリニック

・脳神経外科専門医、金沢市在住、射水市出身)



イラスト・野畑桃花